

茫々五十年、想い遥かなり —今は昔、海軍少年飛行兵の日々—

福岡市東区 森下 孝一

「ビー！！ソーインオコシゴフンマエ・総員起こし5分前」、スピーカーから2度繰り返して起床予告が流れる。

ここは、桜島を目の前に眺める鹿児島市鴨池海岸一帯を占める「鹿児島海軍航空隊」隊舎群の中の1棟である。昭和19年8月1日志願入隊したばかりの15、6歳の少年300名余が静かに眠っている。いや、実は目覚めてはいるが眠ったふりをしている。あと5分間は動くことを禁じられているのである。

彼等の正式呼称は、「第23期・海軍乙種飛行予科練習生」。入隊と同時に支給された軍帽も、七つボタンの第2種軍装も、何よりも「海軍2等飛行兵」の階級さえも、入隊後幾日も経ていない彼等には何一つぴったり身に着いたものはない。それでも彼等の胸中には、あの桜島の噴煙に劣らぬ「愛国心」がたぎっていた。日、米の死闘は広漠たる太平洋の空に、海に、絶海の孤島に日ごとに激烈となっていた。もちろん当時はその戦況を知るよしもなかったが、国を愛し、郷土を想う少年達が欣然として5尺の体と15年の幼い青春を賭して全国から集まっていた。

戦後50年、今となっては今次の大戦をどのようにも批判することができる。結果から過程を論ずることほど安全な立場で明快なことはない。「特攻」に散った若者を「犬死に」と極めつける人さえある。このような声を聞くと、私は限りなく口惜しく腹立たしさをこえて悲しくさえなる。

…5分間の沈黙の後、0500（マルゴーマルマル）、キッカリ今度は「タンカ・タンカ・タンカ・タンカ・タンカターン」独特のリズムの起床ラッパが鳴り響き「ソーインオコシ・総員起し・総員釣床納め！！」の号令が流れる。丸坊主、下着1枚の少年兵が脱兎の勢でハネ起き、寝具を片づけ、着衣、着帽、洗面をすまし隊舎前に整列する。各班の週番練習生の号令、先導で海岸近くの練兵場まで無言の駆け足。どこにいたかと思われるほど周囲の隊舎から広い練兵場一ぱいに数千人近い少年兵達が集合、整列する。先輩の21期生、22期生、前後して入隊した「甲飛14期生」、その他の水兵達である。起床からこの間僅かに10分ばかり。点呼・訓示・海軍体操・手旗訓練などの後、再び隊舎まで駆け足。とにかく隊内の移動はすべて駆け足。階段は2段ずつ駆け上ることになっていた。テクテク歩いていたり、階段を1段ずつ登っているのを先輩練習生や上官に見つかったら、忽ち「マテー！！」の一喝と同時に鉄拳が飛んできた。朝飯前に隊舎の掃除である。長い廊下を水を浸した「ソーフ」で磨きあげる「甲板掃除」が始まる。3尺の櫓の棒を持った班長の気合いが飛ぶ。「押せ！！」ツツツー。「廻れ！！押せ！！」ツツツー。「廻れ！！押せ！！」。足がこわばる、汗がしたたる、

目の前が暗くなる。掃除というよりは強烈な脚、腰の鍛錬に似た激しさである。掃除が終わるとやっと朝飯、食卓番が準備を終える間、他の者は思い思いのことをしている。航空隊の食事は三食とももちろん麦めしではあったが、質、量とも当時としては随分恵まれていた。それでも育ち盛りに猛訓練の毎日ではいつも空腹を感じていた。

必死でモールス信号を覚えようとしている者もいる。「ト・ツー」=イ、「ト・ツー・ト・ツー」=ロ、「ツー・ト・ト・ト」=ハ、モールス信号は寝言にまで出るようになり、条件反射となるまで叩き込まれる。戦闘の勝敗は情報の正否と遅速にある。そして情報はまさにこのモールス信号によって伝達される。あの『ニイタカヤマノボレ』も、真珠湾攻撃の「全軍突撃せよ」のト連送も、命令を受けた通信兵の指先から叩き出されたモールス信号に外ならない。

乙23期予科練のその後半年の日課は、主として午前中は座学。軍隊とはいえ、少年兵に対する基礎知識と将来の特務士官としての教養のため、普通学の時間はかなり多かった。国語、歴史はもちろん数学（代数、幾何、三角）、物理等々から一般社会では敵国語として禁止されていた英語まであった。もともと日本海軍は英国海軍を手本にして編成・育成されていたし、軍艦に乗り組めば英語圏に行くことも多いということもあったろう。

午後は主として体育が軍事訓練である。海軍体操はもちろん、陸戦、射撃、短艇、水泳、信号（モールス、旗旗、手旗、発光）、運用術（結索、航法）等々連日火の出るような訓練が続いた。夜は温習時間である。

訓練はすべて班対抗、分隊対抗である。敗けると厳しい制裁が待っている。制裁は連帯責任で全員に課される。目をむき、歯を食いしばる毎日である。

各分隊には、中尉の分隊長1名と、少尉の分隊士数名と各班に1名ずつ6名の下士官（上等兵曹から2等兵曹まで）の班長が付いていた。海戦で乗艦が沈没し、何日間も海につかっていたという猛者が班長として着任した時は、班員の緊張は一段と高まった。今思ってみて、彼等は一体何歳ぐらいだったのだろうか？ 少尉の分隊士は予備学生出身であったろうから、恐らく20歳前後、歴戦の下士官でさえ30歳前後だったろう。航空隊司令の飛田海軍大佐も40代だったろう。

昭和20年の春、空母から飛来した戦爆連合の大空襲で鹿児島市内も航空隊も灰燼に帰した。隊内の小さな防空壕内で地軸をゆるがす爆撃音を身を縮めて聞いていた。分隊員の1人が機銃掃射で死亡した。同期の戦死第1号である。すでに、無敵を誇った連合艦隊も、零式戦闘機を中心とする航空艦隊も『刀折れ矢尽き』た状態であるのを私達は知る由もなかった。基地を失った私達は、近隣の種子島基地と鹿屋基地へと分散移動した。鹿屋へ移った私達にはもう飛行兵としての教育は待っていなかった。代って「陸戦訓練」と「陣地構築」が日課となった。陸戦も「夜襲攻撃」、「火炎ビン攻撃」、「箱爆雷攻撃」などなどである。戦車を陣頭に立てて上陸してくるアメリカ海兵隊を想定した白兵戦の訓練である。爆薬箱を背負って戦車に肉迫し、カタピラに投擲するなど、およそ今では想像もできないことであろう…。陣地構築は、鹿屋基地に近い笠ノ原台地に落下傘部隊が降下した時、これを包囲せん滅するための防禦的攻撃体制

の整備である。また、太平洋に南面する志布志湾への来襲、上陸を想定して、この海岸線一带にすべての火器の照準を合わせて、水際せん滅のため周囲の山腹を針ねずみのように武装した。肩に食い込む重い弾薬箱を担いで何度も山道を登ったのは昭和20年の何月だったのだろうか。手すきの時は鹿屋基地から連日のように飛び立つ特攻機（もちろんそれが特攻と明確に知っていたわけではないが…）を、「帽ふれ」の海軍式送別で見送っていた。

そしてその多くが、まだ少年の面影を残す予科練出身の搭乗員であったとは戦後になって知ったことである。今でも火だるまとなって米艦に突入する雷撃機のニュースフィルムを見ると胸が痛み涙が出てならない。

第1次神風特別攻撃隊の指揮を執ったのは、若冠27歳の新婚間もない「関行男」海軍大尉である。もちろんすべて後日知ったことである。私は、決して戦争を肯定するわけでも特攻を美化するつもりでもないが、特攻を悪しざまに言って欲しくない。命令した者も、征った者も国難を背負い、祖国を護ろうとして死線を越えたに違いない。戦争を始めたのは彼等の責任ではない。

私は戦後、社会へ出て勤務するようになってからも、海軍士官養成の場で温習中朗唱されたという『五省』を手帳のトピラに書きつけ読みかえしては自分を叱咤激励してきた。

そして50年、往時は遙かにも遠いものとなった。